

写真は、本州と九州を結ぶ関門橋です。海峡は流れが早くて川みたい。で、こんなに九州って近いのかあ!というのが、初めて陸路?で渡った感想です。とは、余談。

橋の手前側、下関市で、クジラの刺身を食べてきました。



さらに、橋をわたって北九州市の門司港側でみつけたのが、昔の学校給食の再現品でした。パンと、あの脱脂ミルクと、そして「クジラの竜田揚げ」。これもよく出たっけなあ。

というわけで突然ですが、今週はクジラの話。インターネットで次のようなやりとりを見つけたものですから。(無断で抜き書き)

「食文化」とカネ(本音)

調査捕鯨打ち切りのニュースを見ました。シーシェパードの大勝利といったところですね。

「妨害すれば日本は屈服する」とわかったことは、彼らにとって今後の大きな力になることと思います。

*

そういう形ですが、調査捕鯨を実施している日本鯨類研究所が赤字が累積し、存続が危うい状態だったので、シーシェパードの妨害を口実に打ち切ったというのが実情のようです。

クジラ肉の在庫は、毎年1000トンほど増え、昨年末では5000トンを超えたそうです。調査捕鯨では過去2年で4700トンほどの収量だそうですから2年以上の在庫があります。鯨類研究所はクジラ肉の売り上げが主な財源ですから、調査捕鯨を続けるには巨額の税金投入が必要な状態だったのですが、こうした理由で打

ち切れれば関係者の責任問題が起こるのでできなかったのでしょうか。シーシェパードの妨害が理由なら責任問題は起きないので、打ち切りを決めたのだと思います。

もちろん、ご指摘のように対外的には悪例を残した事になりますが、そうした配慮より内部の責任問題を避けるほうが官僚としては優先するのではないのでしょうか?

*

日本の食文化を守るため捕鯨を続けよという主張には疑問があります。

たとえばツグミは、北陸などでは広く食べられ、庶民だけでなく料亭でも出されていました。ツグミだけでなく野鳥一般ですが、禁猟になった時、伝統の食文化を守るため(限定的でも)認めよという意見はなかったように思います。

この違いは、ツグミ猟に関係したのは個人か地場産業的な中小企業だっ



里のギャラリー 140



たのに、南氷洋の捕鯨は国策的に行われ、大企業が関係していたからではないか?と疑念を持っています。

「白鯨」を引き合いに出すまでもなく、捕鯨は欧米で広く行われていました。鯨油が目的だったので、石油製品などで鯨油がなくなったのが、ノルウェイなどを除く大部分の欧米諸国で捕鯨が行われなくなった理由でしょう。

今ではホエールウォッチングのほうが経済的利益も大きいようで、オーストラリアやニュージーランドで捕鯨反対が強いのはこういう理由もあると思います。もちろんシーシェパードなどは野生生物保護、共存の理念に基づいて行動しているし、それに資金援助している人たちもそういう理念に賛同しているからでしょうが、現実を動かすうえで最も力があるのは経済だということは、この場合も当てはまると思います。(後略)